九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

シェイクスピアの女性觀

豊田, 實

https://doi.org/10.15017/2332985

出版情報：文學研究. 36, pp.31-35, 1948-03-30. 九州文學會
バージョン：
権利関係：

シェイクスピアの女性觀

豐田實

前書き

小野島君とは東京帝大の學生時代からの知合ひである。同君は梵文學專攻に移る前、私と同じ英文科の學生であつた。さうして再び九大で一緒になり、二十年の交はりを續けることになつた。實は同君は本誌の私の還曆記念號のために、同君の五高時代の追憶から漱石の小說の背景に關する隨筆を書くつもりだと、私に話してゐたが、その機を待たずして彼の岸への旅を急いだ。同君はかねて私とシェイクスピア研究とを結びつけて考へてゐた。さうした關係から、私はこの記念號にこの一文を寄することにしたのである。之は昨年の十一月十二日のラヂオの婦人の時間に、東京から放送したものである。さゝやかな一文であるが、之を以て同君の靈に手向けの花としたい。

シェイクスピアは屢々大自然にたとへられます。その劇にはありのまゝの世の中の姿が寫し出されてありまして、女性だけを見ても、野山に里に咲き出づる四季の花のやうに種々雜多であります。眞赤なばらのジュリエット、谷間の姫百合を思はせるコーディリア、狂ひ咲きの朝顏に似たオフィリア、知らずして鋏を待つ白菊のデスデモナ、咲きほと

るぼたんの花の心に金色の毒蛇がうづくまつてゐるクレオパトラなどもあります。人生の園に咲きにほふかうしたそれぞれの花について作者はその善惡優劣を言はず、たゞ咲くがまゝ、散るがまゝに任せるのでありまして、此處に詩人としての彼の大きさと、彼が大自然にたとへらるる所以があるのであります。

然し一面、吾々はシェイクスピアの女性觀を知ることができないでもありません。この文豪の人物創造の一つの秘訣は對照法であります。例へば『リア王』の中のコーディリアのゆかしさは、二人の姉の親不孝との對照によつて愈々深く、『テムペスト』の中のミランダのうぶな美しさは、半人半獸のキャリバンの醜さによつて益々輝くのであります。尙かうした對照は一々の作品だけでなく、シェイクスピアの劇を全體として觀てもそこに發見されるのでありまして、私はかうした自然の判斷に導かれつゝ、皆樣御存じの三人の女性を選んでシェイクスピアの婦人觀を考へたいのであります。

英國の或る有名な婦人批評家が云つて居りますやうに、シェイクスピアの劇中の婦人は皆心の底からの女でありまして、その或る者は現に戀をして居り、或る者は過去にその經驗を持ち、少なくともその可能性を有してゐるのであります。然しその中でもジュリエットは戀愛そのものゝ化身であります。さき程私はジュリエットを眞赤なばらと云ひましたが、このばらは蕾から三分五分七分と急速に開き、御承知の通り、滿開に至らずして散つて了ひます。わが愛人を夜の太陽になぞらへたジュリエットには多分の詩的素質がありまして、之が彼女の愛を純眞、熱烈ならしめましたが、その結果は悲劇でありました。尤もロミオとジュリエットとの熱烈な愛は二人の死後もなほ融和力を失はず、多年反目してゐましたヴェローナの二軒の舊家を再び結んだのでありますが、然し何と言つてもジュリエットの早熟と思慮

不足は認めないわけにはいかないのであります。こんなお嬢さんのある家庭は不幸であります。それではどうしてこんな娘ができたかと言ひますと、それには二つの原因があつたやうであります。先づ両親があまりに舊弊、いはゞ封建的で、親子の親しみがなく、ジュリエットが自然最も親しくしたのは乳母でありまして、この乳母が相當俗悪なものでありました。かうした家庭生活の缺陥からこの悲劇が生れたことは、反省に値するものがあると思ふのであります。

次はマクベス夫人であります。此の婦人を單に極悪非道の人とばかり見る批評家もありますが、さう簡單には片づけられないのであります。夫人はジュリエットよりも年上で、性格ももつと復雑であります。權力慾に驅られ、夫を勵まして王の弑逆を敢行させたのは勿論悪いのであります。然し筋をよく考へて見ますと、王の弑逆は先づ夫の心に萠したもので、動もすればその決心を鈍らさうとする夫を夫人は勵ましたのでありまして、その主要な動機は夫の榮達であり、夫人は全く夫思ひであつたわけであります。且頭のよさにおいては寧ろ夫以上でありました。然しこの夫人の缺陥は、イマヂネーション即ち想像力の不足でありまして、そのため夫人の人生觀は全く現世的物質的となつたのであります。

王を手にかけて、階級を下りて來たマクベスは、血に染まつた自分の両手を見て、「淺間しい姿だ。」と嘆じ、神に祈る氣持になれなかつた苦しさを、夫人に訴へるのでありますが、その時の夫人の答は、「物事をそんなに深くお考へなさるな」といふのであります。尙夫人の言葉によれば、「眠つてゐる者と、死んだ人間は繪にかいたも同然で、描かれた悪魔を恐れるのは子供の目だ。」といふのであります。然し、かうした全然物質的の人生觀が夫の前途

を誤らせ、自らの破滅を招いたのであります。知力はあつたが人生を物質以下に掘り下げて考へることをせず、夫に對する溫かい愛と、目的貫徹の强い意志は持つてゐたが、想像力の缺乏の爲に、詩的想像に富み、宗教心もあつた夫の心理がつかめず、夫の一生を誤らせたのであります。又「そんなに深くお考へなさるな。」と云つた夫人の人生觀は自分の内にある良心さへ見透すことが出來ず、遂には無視した自らの良心に責められて夢遊病となり、不幸な最後を遂げるのであります。要するに、マクベス夫人の場合は、愛情もあり頭もよく、意志も强く、一面立派な婦人でありながら、想像力の缺乏と、それから來る淺い人生觀の爲に、自他を破滅に導いた悲劇であります。

それでは吾々はシェイクスピアの理想の婦人を何處に求むべきでせうか。私は之を『ベニスの商人』中のポーシャにみたいのであります。ポーシャにはジュリエットに見るやうな家庭の缺陷がなく、結婚の相手の選擇にも、思慮深くして感情に走らず、またマクベス夫人のやうな想像力の不足から來る淺薄さもありませんでした。ポーシャはバッサニオを深く愛したと同時に、婚約の指環の事で彼をからかふ朗かさも持合はせてをりました。又ポーシャの知性と適當な意力は、法廷の場のその言動からも判るのでありまして、殊にポーシャの性格の中心は法廷での、次の有名な言葉に示されてをります。――「慈悲といふものには無理がない。それは天から降る靜かな雨のやうに地を潤ほす。それには二重の功德があり、與へる者をも受ける者をも祝福する……それは神御自身の性質であり、地上の力は慈悲が正義に加味される時最も神の力に似る。」

知情意が適度に調和され、その知性は夫の話相手となり得て、しかも明朗さがあり、心の奥には愛の神に對する信仰があつて、此處から湧き出づる思ひやりが日常の生活を律して行く、かうした性格の婦人がシェイクスピアの理想

であつたと思はれます。

尤もポーシャの裁判には無理な點がありました。シャイロックがアントニオの胸の肉を切るのに、正確に一封度でなくてはならず、頭髮一本の重さの差もあつてはならぬとか、肉は切つても血を流してよいとは證文に書いてないとか、こんなことは常識から見れば變なものであります。然し之は寧ろ興味本位の道草で、根本の問題はシャイロックの陰險な殺人的動機にあつたのであります。又男裝のポーシャを看破し得なかつたバッサニオは、愛人の資格を疑はれても致方ないでせうが、之も筋を面白く運ぶためには必要だつたやうであります。

要するにポーシャが現代の日本にゐたら或は代議士の立候補もしたでせう。新憲法が發表された今日、その精神の實施、殊に戰爭拋棄の理想實現の爲には婦人の協力が大切であります。頭が良く、信仰があり、心の底から溫かで明朗な婦人、かゝる婦人こそ日本の家庭にも社會にも必要であり、是がシェイクスピアの理想の女性でもあつたやうであります。（東京放送）